

曾我部 昌史氏 (ゲスト審査員) みかんぐみ 東京芸術大学助教授

結果発表後に講評した曾我部氏は「着想のおもしろさが最も大事であり、そうした作品もいくつかあったが、すべて近代のビルディングタイプに翻訳されていた。それはある面では論理的だが、とても大切なことを見失わせる気がする」と指摘。そのうえで「建築家の仕事とは、場所と人間の関係性をどう構築するか、その場所が持っているものをベースに住んでいる人がコミュニケーションするかをいかに見出すかであり、必ずしも建築物をつくると思い込まず、自分の視線で場所の特徴を探して欲しい」と呼びかけた。

日刊建設通信新聞H15.11.11より

白津 守康 (有)シラツ代表取締役 敷地オーナー

「一番町を賑わす何か・・・」をテーマに据えた今回のコンペは、「賑わい」に敏感なこの街の一員としてとても楽しい企画でした。また等敷地をテーマにデザインしていただきありがとうございました。最近の一番町を見ると「ドラックストア」「コーヒーチェーン店」「携帯ショップ」が乱立し時代の移り変わりを感じるとともに、原色のネオンが目目を刺激します。各店の収益性を最優先化する街づくりは、無性格でいびつなものに成り下がってしまうと思います。以前、パリのモノトーンでしっとりとした街並みを堪能した後、ロンドンでファーストフード店が点在する街並みを見たときせつかくの旅行気分が一瞬でさめてしまった記憶があります。それは味の素が入った料理を食べたときのつまらなさと同じです。一番町を歩くことを昔仙台市民は「番ブラ」といいました。別に何も買わなくても歩くだけで「わくわく」させるような街と街並み、今ではセピア色の思い出ですが暖かさがあつた気がします。今回応募された皆さんは今後建築設計の世界で大きく羽ばたかれることと思います。皆様の活躍に期待しております。

安藤 康彦 (144 アイデアコンペ実行委員長) (株)盛 総合設計 青年部会幹事

R: 受賞作品についてお聞かせ下さい。

A: 改めて思い返しますと、受賞された皆さんの作品は一次審査の段階でも光っているものがあったように思えます。しかしながら、二次審査でヒアリングを行ってみますと、一次審査の段階で作品から受けていた印象と大分違うもの多いことに気づきました。

R: 具体的にどのような印象の違いがあったのでしょうか。

A: 惜しくも3賞には至らなかった作品ではありましたが“PuPu”において、作品から受ける印象は「計画された建物と周辺の建物との隙間、あるいはガラス張りの外壁と内部

の R 状の壁との関係性のおもしろさ。その辺を不成形な敷地にあわせデザイン（表現）していった」そんな印象を受けました。ヒアリングにおいては「新しい考えを応募するチラシにこそおもしろさが有る」そんな内容だったように思われます。このあたりでの相違が、感じられました。

R：他の作品はどうだったでしょうか。

A：逆に表現したいことがストレートに、作品とヒアリングで出ていたものもありました。オーナー賞を受賞された辻さんの作品です。課題に対し直接的に回答を表現されていた印象を受け、私としてはとても高く評価しておりました。

その他にも、“創賑”のステッキを差し込んで自分の居場所を確立する提案や、敷地をはみ出して屋上緑化を計画する案がストレートな感じで良かったと思います。

優秀賞を受賞された羽田・高橋さんの作品は自己表現の場として落書きスペースを盛り込むなど一番町を良く観察しているなと思いました。

R：一次審査の段階で特徴ある作品などはあったのでしょうか。

A：動物との触れ合いの場を提供しようとする案や、仙台名物の牛タンをアピールした作品もあり、そのどれもが特徴ある作品ばかりでした。

R：最後に 144 アイデアコンペを受け、全体の印象は如何だったでしょうか。

A：どの作品も力作ばかりで、本当に素晴らしい提案でした。また、快く引き受けて頂いたゲスト審査員の曾我部さん、敷地オーナーである白津さんをはじめ、影で支えてくれた宮事協の鈴木さん・川村さん等々たくさんの皆さんのお陰で、とても良いコンペになったと思っています。

早坂 陽（144 アイデアコンペ実行委員）（株）構 建築設計事務所 青年部会会長

「具体的な場を核として商店街に賑わいをもたらす事が出来るのだろうか？」

初めての試みであるコンペに 30 点もの応募作品が集まりとても嬉しく感じた。

最優秀賞の「子供の森を創る」は、大変素直に考えてあり作品のみの 1 次審査では 9 位であったが 2 次審査のプレゼンテーションによって広く審査員の心をつかみ、みごと最高得点を得た。他者の「若者による賑わい」中心のアイデアに比べおとなしい感があったが、アイデアは細やかで気持ちの良い空間が提案されていたと思う。

優秀賞の「144! Self - expression」は、自己表現の空間として調査や提案が良くまとめた。緻密で根気強い作品の印象。が、（らくがき）になにか「若さ故の力づく」の+アイデアが欲しかった。

曾我部賞の「isu to tukue」は、表現とアイデアはとても嬉しく建築に頼らないところがよかった。プレゼンテーションで小々失速した感があった。運営方法の不自然さや、核となる

場の取り扱いに配慮が足りなかったのだろうか？ただ作品自体「賑わい」が一番の作品であった。

全体としては、何かのスペース貸しの提案が多かった。短期間で移り変わる発想は、リスク分散型であるがなにかおとなしすぎる気がする。この場所は、白津家が1527年から永い間代々暮らしてきた場所である。一番町の歴史や四丁目らしさを肌で感じて発想することが大切だと思う。稲荷小路の猥雑さや空がみえるアーケード等「らしさ」を凝縮してみるとなにか新しいものが見えてくるような気がする。

個人的に印象に残った作品は、「144 - GreenProject」であり、長い時間をかけてすこしづつ屋上緑が覆われていく案。四丁目全体に拡大すれば、上空から見ると定禅寺通りから連なった広大な森が出現する。他にはないここだけの森だ。持続可能な静的な「賑わい」であり、ビルからビルへのびる遊歩道は、たくさんの訪れるひとのこころを和ませていく。表彰時に分かったのだが大学生と高校生のグループでありおもしろいと感じた。

伊藤 建也 (有)丸由建築設計事務所 青年部会副会長

最優秀賞を受賞された今野久美子さんをはじめ、入賞された方々おめでとうございます。私は審査過程で個人的に感じたことを記したいと思う。今回は審査する側の立場で参加し貴重な経験をさせて頂き、改めて「見せ方」の重要性に気づく結果となった。作者本人の説明の良否で相手に与える印象が大きく変わることは、審査する側に立つと大きく感じ、これは作者の感じ方の比ではない。また、審査員の構成によっても見せ方は重要だ。審査慣れしたベテランの先生方と私のような実務者では受け取り方が大きく違うと思う。今回の一次審査は作品をテーブル狭しとならべ、審査員がそれを廻遊する方法を採用。この場合、重要なのは第一印象。この段階では内容もさる事ながら、いかにして注目を集め興味を持たせ、飽きさせずに細部まで目を通させるかである。単に精密なだけでは日常の業務図書で終わってしまいアピール不足になりかねない。そこで勝ち残ってようやく二次審査への扉が開かれる。二次審査では、作者自身が説明を行うので、考えを伝え易い反面、審査側の感じ方も大きく変わってくる。今回も一次審査ではあまり目立たない作品が、二次審査では輝きを増して、高得点を獲得した作品も数点あったと記憶している。偉そうなことを書いては見たが、私自身、応募する側になれば各審査ごとに見せ方を変える余裕など無い事は判っているが、審査する側に立ってみて気づいたことなので、書き留めておく。そして、これは今後の私自身への課題としても考えて行きたいと思う。

鹿俣 一志 (株)アーバン設計 青年部会副会長

このコンペは、一番町を活気づかせる為には？という商店街の活性化のための建築施設とはどのようなものを競っていただきました。

建築という観点、施設という観点みなさん様々なイメージを持って出展されています。

敷地を一番町という商店街の【顔】に構えたときに見えるもの、今の時代を感じさせられるもの、柔軟な発想。今の私では到底考えつかないものばかりで非常に興味を持って審査できました。

ただし、若者対象の施設作りが多かった…。確かに活気づかせるのは若者かもしれないが周辺の古くからある商店や、お年寄りとの協調性をうたっている作品が少なかったのが非常に残念です。

河越 雅史 (株)桂 設計 青年部会幹事

応募する側から選ぶ側へととなって貴重な体験となりました。応募された作品を拝見するのはとても楽しく発想の自由さが若々しく感じられました。審査は私の見ているものが同じなのか不安になってしまう程、審査とは個人的なものであったし、他の委員との価値観の相違や共感を理解する良い機会を得ることになりました。

選考のなかで、一番町という場を今日の状況の中で社会に対してどのような新しい発信性をもっているかということである。作品の完成度ばかりでなく、新しい空間表現、新鮮なコンセプト等々でした。しかしながら、発表が済み、絞り込みの過程においては圧倒的多数の支持をえるものは少数にとどまり、建築批評の多様性を改めて認識させられました。

では個人的に心に残り選択した作品といえば、裏切りを伴った「不思議な建築」の幾つかであったように思います。

須藤 昭 鷹嘴建設(株) 青年部会幹事

「……………」や「??？」や「!!!」本当に様々な作品がありました。町の中に森や滝、動物園がある「ほのぼの癒し系」、食を題材とした「グルメ系」、中でも強く印象に残るのは客数や人気投票で店の配置や撤去が決まってしまう「バトル系」です。実際私達の仕事の中でも入札やコンペで日々バトルをしている訳ですけど、意外と今の学生さんは、私の世代より生存競争を生き抜くたくましい感覚がみなぎっているのかなぁなんて関心してしまいました。最後に参加して頂いた皆さん一人一人が将来立派にクライアントの要

求を満足できる様なプロの建築家になって欲しいと思います。

結果発表後、講演した曾我部氏は、「応募作品全体を通じて、そのほとんどが真面目」と総評し、「建築技術は後から習得することも可能であり、着想・アイデアが重要である」と学生たちにアドバイス。キーワードに、近代ビルディングタイプへの翻訳、ステップ主義的評価、身近な視線、建築家の可能性 - をあげ、「コンペでは多くの学生が建築物にこだわり、どういう建物にするか、の視点になっている。また、リサーチが実施されておらず、自分自身の視線を信じてほしい」と述べ、建築家として向き合うことの重要性を説いた。

日刊建設産業新聞 H15.11.12 より

今回のコンペは、タイトル通りアイデアコンペであり、アイデアが最も優先されるコンペでありました。

一番町を賑わいのある街にするためにどんなことを企てるかが最大の評価のポイントで、それには、応募者が敷地やその周辺環境、一番町の歴史、現在の一番町を取り巻く社会状況を注意深く観察し、構想していることをアピールする作品の提出を期待しました。

ここでは、応募作品の中で私が注目した3作品について講評します。

今野さんの「こどもの森をつくる」は、現在の一番町の問題点として、子供を排除したまちづくりがおこなわれており、嘗てのように子供を連れて買い物をしに行く魅力ある一番町ではなくなったことを指摘し、その解決策として提案した作品で、その着眼点、構想力は非常に完成度の高い作品でありました。しかし、描かれた建築はアイデアを彷彿させますが、抽象的で具体性に乏しかったところが悔やまれます。

辻さんの「isu to tukue」は、多くの応募者が敷地に建築物を構築することに力を注いでいる中で、この作品は、建築化することを避け、椅子と机をレンタルし一番町を埋め尽くし街を楽しんでもらおうとするソフトとしての提案で、非常に現代風の斬新な提案で好感を持ってました。しかし、そのソフトを裏付ける、敷地に対する詰めが甘かったことが、残念ながら最優秀賞を逃したと考えます。

辻本さん「144+RENTAL KITCHEN SPACE」は、優れたアイデアで、個人的に好きな提案でした。誰もが使えるレンタルキッチンスペースが一番町の中にあると、本当に楽しいことが起こり得る可能性があると感じられました。また、この提案はさらに発展すれば、我々の生活スタイルをも変化させることが出来る提案でもあると感じました。しかし、描かれた建築が、その優れたアイデアと同等以上の説得力を持ち得なかったことが悔やまれます。非常に惜しい作品でした。